



Title	'to dream a strange dream'の構造 : 「同族目的語再考」
Author(s)	葛西, 清蔵
Citation	北海道大學文學部紀要, 28(1), 1-24
Issue Date	1980-01-31
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/33439">http://hdl.handle.net/2115/33439</a>
Type	bulletin (article)
File Information	28-45_PL1-24.pdf



[Instructions for use](#)

# ‘to dream a strange dream’ の構造

——「同族目的語」再考——

英語学講座 葛 西 清 蔵

# ‘to dream a strange dream’ の構造

——「同族目的語」再考——

英語学講座 葛西清蔵

0. いわゆる「同族目的語」(cognate object, cognate accusative) は英文法の中ではごく一般的な事項の一つであり、どの文法書にでもふれられている。とくにわが国の文法書では必要以上に大きく扱われる傾向がある<sup>(1)</sup>。しかしながらこのような過大視そのものがそのまま、この「同族目的語」のほんとうの姿を見失わせているためであることも事実であるように思う。あとで見るように「同族目的語」にはさまざまなちがった説明がなされているがそのいずれもこの「目的語」の一部にしかあてはまらないことにも、その性質の複雑さ、姿のとらえにくさがあらわれている。

小稿の目的は「同族目的語」の性質をとくに「目的語」の位置に注目して明らかにし、より一般的な言語事実の一部として位置づけようとするものである。便宜上つぎのように論をすすめる。

1. 「同族目的語」の問題点。
2. 「同族目的語」の位置と性質。
3. ‘to sleep oneself sober’ との関係。
4. 結語。

1. 「同族目的語」の性質がはっきりしないことはそれに与えられる定義にすでによくあらわれている。たとえば *NED* につぎのような定義がある。

cognate object: an object of kindred sense or derivation spc.  
that which may adverbially follow intransitive verb as in 'to die the death'

「目的語」が副詞的な働きをするということも、副詞として「自動詞」のあとにくることもたしかにそうであろうが、これだけでは（後でみるような一見類似しながら性格が全くちがう）他の事実と区別できない。

また（これは決定的なことだが）「同族目的語」のおよそ9割はなんらかの形で「修飾語」をもっているのにこの定義ではこのことが全く考慮されていない。例文 *to die the death* がなによりもこれを示している。以下、もう少し個別的に問題をとりあげてみたい。

1.1 「同族目的語」として最も多くみられるのは、その定義に多少のちがいはあれ、つぎの (1. a) のようなものであろう。

1. a to smile a happy smile
- b to smile happily

(1. a) には (1. b) のようなパラフレーズが可能である。「同族目的語」が「副詞的」という根拠はまさにこれであり、'completes or specifies more narrowly the meaning of verb' (Chafe), 'explaining more fully the idea expressed by the verb' (Curme. *Syntax*) という意味では全くただししい。しかしこの説明のしかたが不十分であることは (2. a) に対する (2. b) がないし (3. a) と (3. b) は意味がちがうことではっきりしてくる。

2. a to dream a strange dream
- b to dream strangely
3. a to fight the good fight

b to fight well (Jes. *MEG*; *Ph. of Gr.*)

しかもつぎの (4. a), (4. b) では「同族」の名詞をくり返すだけで、動詞の意味を ‘more fully’ も ‘more narrowly’ に説明してさえない(2)。

4 a to die the death

b to dream a dream

あとでもふれるように「同族目的語」は受動態もつくれるし「同族目的語」を「副詞的」と規定するのははっきり一面的である。

1.2. 「同族目的語」はよく「結果の目的語」(effected object (Quirk et al), object of result (Bryant), subdivision under the object of result (Jespersen)) といわれる。‘to dream a strange dream’ において ‘to dream’ の結果、その ‘dream’ は ‘a strange dream’ であった、という意味では一見たしかに「結果」であるようだがこれが ‘to dig a hole’ とおなじ意味で「結果」といえるだろうか。‘to dream’ はそれ自体で完結した(中島・毛利)動詞であり、‘to dream’ は同時に ‘a strange dream’ なのである。‘a hole’ はあくまで ‘to dig’ の結果として出来上がったものなのであって ‘to dig’ そのものが ‘a hole’ なのではない。

Halliday は動作 (process) の及ぶ範囲 (scope) を明確にする関与者 (participant) として ‘range’ を設定し、これに最も近いものが「同族目的語」であるとする。さらに ‘range’ は動詞とおなじ範囲をもつ (co-extensive) ものであって、現実には、その動詞の名詞化されたものにすぎないのであり、‘range’ は語源的に「同族」の語によって具現されるとする。これはまさに ‘to dream’ と ‘a strange dream’ の関係にあてはまる。‘to dream’ の結果として ‘a strange dream’ ができあがったのではない(3)。

‘to dream a strange dream’を「結果の目的語」というのはこれ  
を特徴的に表現する用語としては適切ではない。やはり別のところにそ  
の「同族目的語」そのものの特徴を求めなければならない。

1.3. また「同族目的語」はつぎのような例に類するものと考えて「副

5. a The baby weighs nine pounds.
- b The book costs ten shillings.

詞的補足語」(adverbial complement) (中島)とすることもできよう。  
しかしこれも、動詞の意味を‘specific’にするという点で「副詞」で  
あるというのであれば「同族目的語」にも類するところはある、とい  
うにすぎない。

まず‘the baby’は重さをもつのは当然であり the baby weighs  
だけでは「完結」しない。nine pounds が最も重要な情報をになっ  
ている。むしろ weigh, cost は‘empty’ word <sup>(4)</sup> になってしまってい  
る。‘to dream a strange dream’ではどうであろうか。たしかに  
‘a strange dream’がつけば‘to dream’は「無内容化」(毛利)  
する<sup>(15)</sup>。

しかし、つぎの6, 7において

6. a The book weighs a pound,
- b\* The book weighs.
7. a He sang the Marseillaise. <sup>(6)</sup>
- b He sang. (Chafe)

The baby dreams. はそれ自体でまとまった意味をなす、つまり自己  
「完結」的であるに対し、The baby weighs. は不完全であり補足語  
(complement) が要る。しかも「同族目的語」の動詞は「自動詞」であ  
りながら「受動態」をつくることができる。これは結局 weigh が「状

態」を表わす語であることによる。「動作」がない限りそれによる「結果」は生じようがない。「結果」を生みだす「受動態」もつくられない筈である。Chafe は (8 a), (8 b) のように

8. a  $\left( \begin{array}{l} \text{statable} \\ \text{completable} \end{array} \right) \rightarrow \text{weigh, cost, measure}$   
 d  $\left( \begin{array}{l} \text{action} \\ \text{completable} \end{array} \right) \rightarrow \text{sing, play, win}$

「状態 (state)」, 「行為 (action)」とはっきり両者の区別をする。このちがいが今までの「同族目的語」の説明では注目されなかったために必要以上に他の言語事実と混同されてきた。

1.4. つぎに「同族 (cognate)」そのものについてみよう。いまもし文字通り ‘cognate’ を

9. a ‘descended from common ancestor’ (COD)  
 b ‘coming naturally from the same root’ (OED).

とすればよくあげられる ‘to fight a fierce battle’ などは除外されることになる。現に Halliday は「同族」であるかどうかはつぎのような「名詞化」ができるかどうかによって区別できるとする。すなわち、「同族」の場合は \*race-runner, \*song-singer, \*game-player のような「名詞化」を許さないが、そうでない時には, relay-runner, ballad-singer, tennis-player のように名詞化が許されるとする。つまり動詞の意味が一つの語として ‘specific’ にされているとき, たとえばは ‘to run relay’, ‘to sing ballad’, ‘to play tennis’ は彼にとっては「同族」ではない。「目的語」そのものが一語としてあまりに ‘specific’ にされているのである。

もし「同族」を (10 a), (10 b) のようにすれば範囲はずっと広くな

10. a 'of the same or *similar* nature, (NCD)

b 'the same or very *similar* form' (Kruisinga)

る。いわゆる「同族目的語」はここまでの例を含めている。ちなみに battle は COD. によれば '*Fight esp, between large organized forces*' の意味が与えられている。つまり 'battle' は一語として 'fight' をさらに 'specific' にしたものであることにとくに注目しておこう。

sing は song を sing するのであるからと Chafe のように

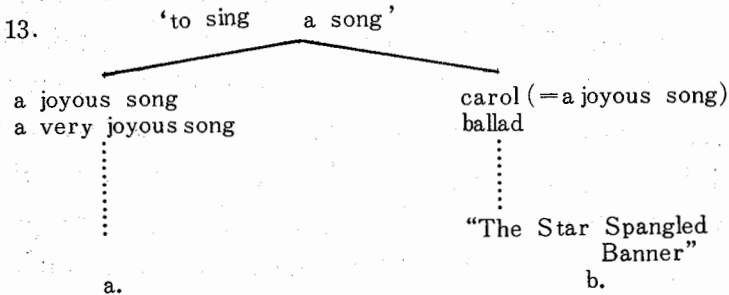
11. comp —》 song / V  
N sing

を指定するのはいいが、さきにあげた彼の '*completes or specifies more narrowly the meaning of the verb*' の '*more narrowly*' にことさらに注目して (12. a), (12. b) の二文をおなじレベルで考える

12. a Tom sang "The Star Sprangled Banner"

b Tom sang a song.

ことができるものであろうか。



(13. a), (13. b) において (a) では a song がなんらかの「修飾語」を加えることによって 'specific' になっていく。それに対し (b) では 'carol' 'ballad', などたしかに 'a song' と 'similar' な語であ



ろう。‘carol’は‘a joyous song’(COD)とあるように、たしかに‘song’より‘specific’なものである。これをおしすすめて典型的なものとしては‘The Star Spangled Banner’のような固有名詞的な曲名があげられることになる。

ここで問題になるのは、動詞の意味を‘specific’にするとき、それは別の「修飾語」をつけて‘specific’にするか、そうでないか、つまり(13. a)か(13. b)のどっちであるかということである。‘The Star Spangled Banner’はたしかに a song を‘specific’にしたものであってもこの両者の間に「同族性」はすでに感じられず to speak English, to eat an apple の場合とおなじく「他動詞」+「目的語」の関係でしかないであろう。従来「同族目的語」では(意味が‘similar’な語と意味が‘specific’になった語のちがいを)はっきりこのことを示さなかった。そのため多くの資料にもかかわらず「同族目的語」には内容のきわめて曖昧なものが雑然と含まれてしまい、したがって「同族目的語」の性質がいつそうつかみにくくなっていたと思われる。

1-5. 最後に「同族」の語についてもう一つの場合を考えてみる。倉田は(11. a), (14. b), (14. c)を「同族目的語」とみなしている。

14. a .....and he had lived in London *most of his life*.

b .....had lived in Winesberg *all her life*

c I've lived near Oxford *all my life*.....

live-life はたしかに「同族」語の関係であるが、これは

15. ~ to live a happy life

とおなじくは考えられない。両者ははっきり性質のちがうものといえる。

(14. a), (14. b), (14. c) ではそれぞれ ... in London, in Winesberg, near Oxford で一応完結するのであって most of his life, all her

life, all my life は (16. a), (16. b), (16. c)

16. a ... have done it *all my life* (COD)
- b He stays in his house *all the time*.
- c They danced *all the evening*.

と全く同様に期間をあらわす単純な「副詞」であり上で見てきたような性質をもつ「同族目的語」とはもともと異なる性質のものである。また she loved *love*. (倉田) も「恋を恋する」のように love は単純な「目的語」であろう。このようにその文の意味を考えないで問題の個所だけをあまりに形式的に見てしまうことも「同族目的語」を曖昧にしているように思う<sup>(7)</sup>。

2. 1.1—1.5でのべたことをふまえた上で「同族目的語」の位置上の性質を考えてみたい。

2.1. まず手がかりに, 'to smile one's approval' のような例について Bryant が言っているところをとりあげる。彼女によると「同族目的語」は 'odder' な構文であるが, (17. a) に対しては (17. b) のような文が考えられ, しかも (17. a) は

17. a She smiled her approval.
- b She smiled and the smile indicated her approval.

(17. b) の凝縮文 (condensation) であるとする。もっとも (17. b) の 'and the smile indicated' の部分が「省略」されて (17. a) になったといっているのではなく, 意味の上から, この部分をおぎなわないと 'odd' でない文にはならないからである。問題はこのような方法で他の「同族目的語」も説明できるかであるが, 'to dream a strange dream' に対する同義な文として (17. b) のような文は考えられない。

したがってこの方法は一般的なものとは言えない。Jespersen が(18.a)

18. a She laughed thanks.  
b ‘express ..... by-ing’ (Ess.)

に対して(18. b)を考え、Ross が(19. b)を

19. a Tom<sub>i</sub> registered (his<sub>i</sub>) displeasure by frowning ⇒  
b Tom<sub>i</sub> frowned (his<sub>i</sub>) displeasure.

(17. a) から「変形」によって導きだそうとするのも基本的にはまったく同様なものであるが、この種の例にしかあてはまらないものであり受けいれるわけにはいかない。

ただつぎに見るように、この「凝縮」という考え方には重要な示唆が含まれているように思う。すなわち、‘express ... by-ing,’ ‘register ...by-ing’ によるのではなく(17. a)を(20)のように一般化してみ

20. She smiled and it (=the smile) was a smile of her approval.

ると‘to breathe ones last’ ‘to dream a strange dream’にもよくあてはまる。現に「同族目的語」に対するこのような扱いは一般に考えられるものの一つであり、たとえば(中島・毛利)はその理由をつぎのようにのべている。つまり、(21)

21. He smiled a nervous smile.

の文について、「He smiled nervously という動作は主語自体において完結している [smile されるものはない]」。この動作を英語は「名詞に

重要な意味を持たせ、その名詞でまとめる表現を好むから」<sup>(8)</sup> (22) のように「名詞の表現でまとめる」ことができる、とする。

22. He smiled — it was a nervous smile.

さらに「S + V + O」という形が一般化し、これが便利であるから、この場合 *smiled, smile* の間の — による中断を除去して「S + V + O」にもっていくのは自然のなりゆき(傍点筆者)であるという。‘to dream a strange dream’ に対応する ‘to dream strangely’ が無い以上この種の説明をすべての「同族目的語」に認めるわけにはいかない。また「便利であるから…中断を除去する」という説明の仕方もあまりに ad-hoc すぎるといえよう。

このような「不自然さ」をさけるには (23. a) よりも (23. b) のような文との関連性を考える

23. a He smiled and (—) it was a nervous smile.

b He smiled, a nervous smile.

方がはるかに無理がない。これが決して「不自然」でないことは現に (24. a), (24. b) のような例文が普通に見られることでもわかる。

24. a Kitty laughed — a laugh musical, but malicious (Jes. Ph. of Gr.)

b She smiled — a warm sunny smile. (中島・毛利)

さらに注目したいことは (23 b) のような文はさらに一般的なつぎのような文にも関連するものであることである。

25. Her face was very pale, a greyish pallor. (Jes. Ph.)

of. Gr.)

26. a Note also the ungrammaticality of \*they say... there to be more women, ... a fact which would follow if these were subjectless ... (Bresnan)
- b ... one can infer only that *than*-clause is not identical with the object of *think*, a rather trivial result. (Bresnan)

(25) は Jespersen (*Ana. Syn.*) が ‘apposition’ よぶものであるし (26) は (27), (28) の ‘explanatory apposition’ (*Mathesius*), ‘extraposition’ (Jespersen (*Ess*)) にそれぞれ相当するものである。

27. I saw him yesterday, *poor fellow*.

28. There he sat, *a giant among dwarfs*.

さらにつけ加えるならば、この構造ははっきり (29) のような ‘quasi-predicate’ との関係も無視することはできない。

29. They parted *the best of friends*. (Jes. *Ess*.)

また (30)―(33)

30. He struck me *a heavy blow*.

31. It blew *a heavy gale*.

32. They went in despair, *and no wonder*.

33. I had to bolt, *and that at once*.

もなんらかの関連性をもつことも否定できない。

すくなくとも「同族目的語」もこうして見るかぎり決して孤立した言語事実ではなく、きわめて一般的なものと関連をもつものであることが

確認できよう。

2.3. このように自己完結的な「自動詞」のあとに「同格的」におかれた名詞が「同族目的語」に非常に近い関係をもつことは上にみたが、(23. b), (24. a), (24. b) のような文がどうして「自然のなりゆき」でS + V + Oの構文に移行するのか。中島・毛利にはこの説明が全く欠落している<sup>(10)</sup>。これを問うのがこの項の目的である。

2.3-1. 「同格目的語」も古くは対格であったり与格であったりしたがそれは語順ではなく語尾屈折によって知ることができた<sup>(11)</sup>。歴史的な起源はさておいても「自動詞」のあとの「同格的」な「同族」の名詞がどのようにして「目的語」の資格をもつのであろうか。

まず最も一般的に「同族目的語」をとる動詞をあげるとつぎのようになる<sup>(12)</sup>。(aはごく一般的なもの。bは比較的まれなもの。イタリックは「欽定英訳聖書」(A. V.)にとくによく見られるもの)。

33. a breathe / dance / die / dream / feel / fight / go / laugh  
live / run / say / sleep / smile / speak / ...
- b *command* / enjoy / mean / murmur / mutter / *pray* /  
*sacrifice* / *sin* / *sound* / *swear* / win / work / ...

まず注目されることは頻度のたかいものはほとんどが日常的な単音節(語源的にはゲルマン系)であることであろう。また頻度の高いものはきまって自己完結的な「自動詞」であり、1.3.でのべたことはここではっきり確認できる。

2.3-2. ではこの「自動詞」がどうして同族「目的語」をもつことになるのであろうか。ここでは何が「目的語」の資格であるかについて考えてみる。さまざまな「目的語」の定義(たとえば Jespersen, *Ess.* 11.3.)はさておくとして、Postal は「補文」の主語が「主文」に「くりあげ

(raising)」されて「目的語」としての資格をもつかどうかについてつぎのような例をあげている。

34. I believe *very strongly* { that Tony is honest.  
\* Tony to be honest.

すなわち「主文」の動詞のあとになんらかの副詞的な要素が来ると、つぎの「補文」は「補文子 (complementizer) がない限り非文となる。この副詞のために Tony to be honest の Tony は「主文」の「目的語」としての資格を得ることはできない。このことは Bresnan でさらにはっきりする。

35. a He believes *secretly* that Jane is a spy.  
b He *secretly* regards Jane as a spy.  
c \* He regards *secretly* Jane as a spy. (1972)
36. a \* She ordered *last night* the bodies to be dragged away.  
b She ordered *last night* for the bodies to be dragged away.
37. a They still want *very much* for him to go to Harvard.  
b \* They still want very much [him to go to Harvard] (1977)

動詞のあとに副詞が仲介するとつぎの「補文」は「補文子」をつけて「補文」であることを示さなくてはならない。しかし動詞のあとに副詞がない時には「不定詞補文」の主語は確実に「主文」の「目的語」としての資格を得ることになる。つまり「動詞の直後」という位置はその動

詞の「目的語」としての資格を得るための決定的な位置なのである。「くりあげ」という「変形生成文法」の用語をつかうまでもなく、この「動詞の直後」に「同格的」な「同族」の名詞が位置することになる。「語順の圧力 (pressure of word order)」(Fries) により、S+V+O の型にはまり名実ともに「目的語」としての資格を得、「自動詞」でありながら「受動態」さえつくれるほどに固定してしまう。そして動詞がもともと自己完結的で第三者に働きかける種類のものでない以上、その次に来る語はその動作に言及する語でしかあり得ないのも当然であろう。Bolinger は「追加表現」(after-thought) として加えられたものが、文の必要な要素とに規定されるようになるという事実についてのべている。いわゆる「同族目的語」はまさにこの「追加表現」が動詞の直後にあるために「目的語」とされたものであるといえよう<sup>(13)</sup>。これこそ「同族目的語」の姿なのではあるまいか<sup>(14)</sup>。

倉田は中期英語から現代英語にかけて「同族目的語」の例約 830 をあつめ詳細な検討を加えているがこれらのうち 13 例は間接目的語をもち<sup>(15)</sup>、副詞を動詞のすぐあとにもつものは実に 6 例 (0.7%) にすぎない。しかもこの例には (14. a), (14. b), (14. c) であげた「同族目的語」とは考えられないものが入っているのである。このことは実に明りように上に見て来たような「同族目的語」の性質を証明している。

(ところが残念なことに倉田においてはこのことに件する言及がみられないことがこの構造をとらえきれなかった原因であろう)。このことをふまえない限り、「自動詞」が「目的語」をとることも、そのあとに来る名詞が一見「結果的」であることも理解されない。「同族目的語」はすぐれて「語順の力」の問題なのである。

2.3-3. われわれは今まで故意に 'to dream a dream,' 'to lord it' のような例にふれないうえきた。これらの例は上のようなやり方では説明されないものである。He dreamt a dream. に対して He dreamt and it was a dream. や He dreamt, a dream. はともに考えられないか



らである。すでにみたような理由が考えられないかぎり別のところにこの種の構文の存在理由をもとめなければならないが、意味上の理由がない<sup>(16)</sup>以上、形(あるいわ音)に理由をもとめなくてはならないだろう。

Jespersen (*Ph. of. Gr.*)はこの種の構文は‘actual speech’では稀だという<sup>(17)</sup>。目的語がとくに新しい意味を伝えるわけではないのでそれもうなづける。いまかりに‘actual speech’とはなれたものとして「欽定英訳聖書(A. V.)」をとりあげてみよう。

A. V. の中でリズムがいかに重要であるかはいまさら言うまでもない。たとえばグレンジャーは A. V. の中の‘do’の使われ方についてのべ、

31. a A gift *doth* blind the eyes of the wise... (Dent. 16:19)

b I the Lord *do* sanctify... (Lev. 21:15)

(38)などに典型的に見られるように *do* (*th*) はここではリズムを整えるためにのみ使われているとする。これと全く同様に(39. b), (39. c)においても「同族目的語」(に類する語)をいれることによってリズム

39. a There the wicked ceases from troubling And there the weary be at rest (Job 3:17)

b And Israel *vowed a vow*, unto the Lord... (Nun. 21:2)

c And Joseph *dreamed a dream* and he told it...(Gen. 37:5)

が確保されている。‘to lord it’の *it* についてもおなじことがいえると思う。ほかの例にくらべて意味上の理由よりは、はるかにリズムの理由が大きいように思われる。

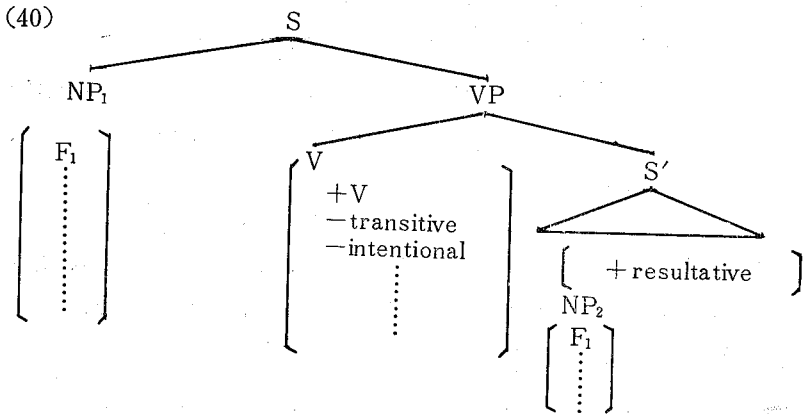
こうしてみると ‘to dream a strange dream’ にしろ、‘to

dream a dream' にしろ、「同族目的語」は、従来のように「動詞の意味を 'specific' にする、という意味の面での規定の仕方より語順、リズムというようにすぐれて「形」の側の問題であることがうきあがってくる。

3. 筆者はすでに 'to sleep oneself sober' の構造の性格をいくつかの面から論じた。<sup>(18)</sup> そのときこの構造は、

1. 'sleep' に類する動詞は「自動詞」(又は「擬似自動詞」)であること。
2. 'oneself' に類する語は主語に 'relevant' な素性をもつものであること。
3. 'oneself sober' は 'sleep' の結果をあらわす「ネクサス」であること。さらに最も重要なこととして、
4. 'sleep' と 'oneself' の間に一切の副詞的な要素が介在しないこと。このため 'oneself' が「語順の圧力」でいかにも 'sleep' の「目的語」的になっていること<sup>(19)</sup>。

など指摘した。そしてこの構造はかりに「変形生成文法」のやり方にしたがえば概略 (40)



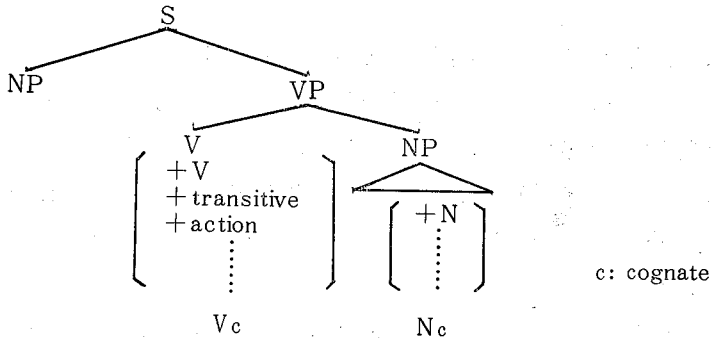
‘to dream a strange dream’ の構造

という構造を与えられるべきであること、S' の主語 NP<sub>2</sub> が「くりあげ」によってVの「目的語」になるのであろう、とのべた。

ここで、この構造はわれわれが問題にしてきた ‘to sleep a strange dream’ の構造との性質の類似性は無視出来ないものであることが明白である。一方が「同族」の「目的語」であるのを別にすれば、そのもつ性質はほとんど共通するものである。

いまかりに ‘to sleep oneself sober’ の構造 (40) にならって ‘to sleep a strange dream’ の構造をかけば (41) のようになるであらう。

(41)



しかしもう少し深く一般性に注目して (42)

(42) She laughed continually : *her laugh was satirical.* (*J. Eyre*)

のような文を考慮すれば (41) よりはむしろ (40) のように「補文」をもつ構造を考えるのが正当と言える。Jespersen が

(43) a. Kitty laughed — *a laugh musical, but malicious.*  
(=24.)

- b Her face was very pale, *a greyish pallor*. (=25)  
(*An. Syn.*)

の 'a laugh musical, but malicious,' 'a greyish pallor' を Nexus substantive (in apposition) といっていることにもその根拠あらわれているといえるし、中島・毛利が *He smiled nervously.* を a nervous smile と「名詞でまとめる」ことができるとして — it was a nervous smile. を考えるのも同様の考えに基くものである。'to lord it' などとくに意識すれば別の方法も考えられるが<sup>(20)</sup>、いずれにせよ VP に支配される s' を「同族目的語」の場合にも考えることができるように思う。

4. 文法ではどうしても頻度の高い言語事実が注目されやすくそれが一つのグループとして一つの名称を与えられる。たとえば「五文型」などは典型的にそうであり、またたしかにこれは多くの言語事実を説明するのに有効である。そしてこれらからうまく説明のつかない例は「…の省略」, 「…的」, 「…として使われる」, 「擬似…」という扱いをされやすい。

いうまでもなく言語事実はどうなにか頻度数が少くてもそれとして他のものとおなじ比重でとりあげなくてはならないし、これらの例も含めて抱括的に説明できたとき文法の目的が達成されるはずである。

筆者はいわゆる「五文型」からうまく説明できないものや、いわゆる「小文」といわれる言語事実に関心をもってきた。この種の文は「伝統文法」では比較的とりあげられたが「新言語学」ではほとんどとりあげられないし、むしろ十分な説明を与えられることはない。この種の「文」に共通にみられるのは、複数の「文」が並列するとそのうちのどの「文」かが中心的になり、他の「文」は従属的になること、そして接続詞、時制のないものなどいくつかの段階をもって「文」としての独立性をなくしていくこと、それと同時に中心となっている「文」に依存度が高くなり S + V + O というきわめて強固な語順をとろうとする傾向があるこ

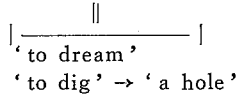
とである<sup>(21)</sup>。

動詞の直後という位置がいかに重要な役割を果たすかが想像できる。少  
稿では「同族目的語」においても動詞のこの位置のもつ役割は決定的な  
ものであり、これが「同族目的語」を特徴づけるポイントであることを  
指摘したつもりである。これらのことは一つの「文」(あるいは文の要  
素)がもう一つの「文」と何らかの関係をもち、一方が「補文」として  
従的な位置にたつとき、どのような動き (behavior) をするか、とい  
う視点から論ずべきものであることを示していると思う。このような視  
点に立つと今まで「擬似…」などとして扱われていた例 (たとえば(25)  
—(33) は他の例と以外と近い視野に入ってくるように思える。

notes

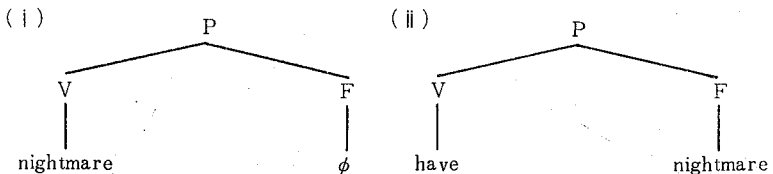
- (1) たとえば Quirk et al では本文 1081 頁のうち「同族目的語」には 13 行しか  
ふられていない。それに対して細江 (『英文法汎論』) では本文 466 頁のうち 3 頁  
細江 (『精説』) では 431 頁のうち実に 23 頁が「同族目的語」にあてられている。
- (2) これに類した ‘to lord it’, ‘to foot it’ なども「同族目的語」としてあげ  
られるが、この it も動詞と「同族」の名詞の一種 (Kellner) と考えてもよい。  
ただ例がきわめて限られているのであとのべるような理由によって ‘to dream  
a dream’ と同様むしろリズムの問題であろう。

- (3) 二者の違いを仮りに図示すれば、  
‘a strange dream’



とでもなる。

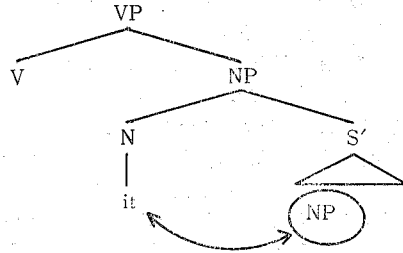
- (4) Jespersen (*Ess*) は  
The natives *go* naked  
The *stood* godmother to his child の go, stood について ‘The verb  
loses something of its original meaning and is approximately an  
“empty” word」といっている。
- (5) Fillmore は「同族目的語」について



- (i) という構造を考え、FにVを‘copy’しそのあとでVの nightmare を have という「代動詞」でりかえ (ii) を導く、という方法をとっているが基本的にはおなじみである。
- (6) 本稿の論旨からいうとこの文は He sang a happy song. とでもした方がよいがむろんこのままで全体には影響はない。
- (7) (i) to breathe one's last  
(ii) to smile thanks  
(iii) But me no buts.
- のような例も問題の一部として考えなくてはならないのかも知れないが、(i) の例は to breathe one's last breath (ii) は to smile a smile of thanks に類するものであろうし、(iii) は全く臨時的なものであるから特別問題する必要はないと思う。
- (8) この表現は曖昧であるが英語のもつ一つの重要な性質であることは誰しも認めるところである。たとえば小西は、(i), (ii) などの
- (i) I have a good look at him.  
(ii) I have another good look at him.
- 「名詞表現」には「さまざま変化し、微細な意味の相違をあらわすことができる」し、「同時に動詞表現と違った力強い具体的な表現をつくる」要因があるという。ドイツバインも「行為または事象は名詞構文によって表現される方がそれに対応する定動詞調形よりもはるかに力強く、生気があり、力がある」とっている。
- (9) Jespersen (*Ess.*) ‘isolated predicative’
- (10) われわれはいまこの「移行」を「変形文法」の派生の過程として考えているのではないことをはっきりさせておく。
- (11) (i) ... singath ... song nēowne (対格)  
(ii) se Cynewulf oft miclum feaht (与格)  
なおこれと関係あると思われる  
(iii) he disliked the Banford *with an acid dislike.* (*Fax*)  
(iv) all the animals nodded *in complete agreement.* (*Animal Farm*)  
などを無視することはできない。
- (12) 倉田の例文 800 余からとりあげた。
- (13) Bolinger, p. 85
- (14) She smiled at him a vague happy smile は「同格」としか考えられない。決して「同族目的語」とはなりえない筈である。
- (15) この場合の「同族目的語」はむしろ「直接目的語」と考えた方がよい。動詞は普通「間接目的語」だけを取ることはできないからである。
- (i) He bought me a book yesterday.  
(ii) He bought a book for me yesterday.  
(iii) He bought a book yesterday.  
(iv)\* He bought yesterday.
- (16) 一般に「同語反復」(tautology) は Business in business. Women are

‘to dream a strange dream’ の構造

- women のようにそれなりに「...というものだ」, 「...以外ではあり得ない」などの新しい意味をもつものだが, ‘to dream a dream’ はそうとは思えない。
- (17) 倉田の例文によるとこの種の構文は全体の一割に満たない。
- (18) 「‘to sleep oneself sober’ の構造 — 文中における「節」の動き」『北海道大学部紀要』27-2 (1979)
- (19) その他に, たとえば動詞が「非意図的」になりがちであることなどがあるが, 直接関係ないのでこれ以上はふれない。
- (20) さらに推測を一つ加えれば ‘to lord it’ を考慮して



- のような構造を設定し, ‘to lord it’ のような場合は S' がなく, それ以外の時は S' の NP it を「置きかえる (replace)」というのも理論的には可能である。
- (21) Borkin の論文はまさに「補文」がこの独立性を失い主文に強力に拘束される過程を扱ったものであろうし, Ross (1968), Emonds (1970) は英語がいかに基本的な語順を守ろうとするかを示したものと読める。

references

- 荒木 一雄 (1966) 『英文法 — 理論と実践』 研究社
- Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form* Longman
- Borkin, A. M. H. (1975) *Raising to Object Position*. Michigan
- Bresnan, Y. W. (1972) *Theory of Complementation in English Syntax* Unpub. Diss.
- (1977) “Variables in the Theory of Transformation” in *Formal Syntax*. (eds.) Cullicover *et al.* Academic Press.
- Bryant, A (1971) *A Functional English Grammar*.
- Chafe, W. L. (1975)<sup>4</sup> *Meaning and Structure of Language*. Uni of Chicago.
- Curme, G. O. (1931) *Syntax*. Maruzen 研究社.
- (1953) *English Grammar*. Harper & Row.
- ドイッチャイン (1971)<sup>2</sup> 『名詞構文と英語』 東田訳, 研究社.
- Emonds, G. E. (1970) *Root and Structure-preserving Transformations* Indiana Univ. press.
- Egawa, T. ‘The Cognate Object’ 大塚高信先生還歴記念『英語学論集』。
- Fillmore, C. G. (1968) “The case for case” in *Universals in Linguistic*

- Theory* (eds.) Bach and Harms. Holt, Rinehart and Winston.
- Fries, C. C. (1952) *American English Grammar* Harcourt.
- グレンジャー (1971)<sup>2</sup>『欽定英訳聖書の構文』清水訳, 研究社。
- Halliday, M. A. K. (1966) "Notes on Transitivity and Theme in English" part I *J. of L.*
- 細江 逸記 (1974)『英文法汎論』篠崎書林。  
 ————— (1952)<sup>10</sup>『精説英文法汎論』泰文堂。
- 乾 亮一 (1948)「いわゆる Cognate object について」『英文学研究』26-2。
- 石橋幸太郎 (1964)『英文法論』大修館。
- Jespersen, O. (1951)<sup>7</sup> *The Philosophy of Grammar* George Allen.  
 ————— (1961) *Modern English Grammar* George Allen.  
 ————— (1971) *Analytic Syntax* Senjo.  
 ————— (1976)<sup>22</sup> *Essentials of English Grammar* Harpes & Row.
- 金口 儀明 (1977)『現代英語の表現と語感』大修館。
- Kellner, L. (1958)<sup>2</sup> *Historical Outlines of English Syntax*, 研究社。
- Kruisinga, E. (1932)<sup>5</sup> *A Handbook of Present-day English* II. Noordhoff-Groningen.
- 倉田 達 (1971)『英文法論叢』篠崎書林。
- Mathesisus, V. (1975) *A Functional Analysis of Present Day English on a General Linguistic Basis* Mouton.
- 毛利 可信 (1962)『英語意味論研究』研究社。
- 牛島 文雄 (1961)『英文法の体系』研究社。  
 —————・毛利 (1962)『高等英文法』山口書店。
- Onions, C. T. (1923)<sup>2</sup> *An Advanced English Syntax* Kegan Paul.  
 ————— (1974) *Modern English Syntax* Kegan Panl.
- 大西 友七 (1964)『現代英語の文法と背景』研究社。
- Postal, P. M. (1974) *On Raising* MIT.
- Ouirk, R. et al. (1972) *A Grammar of Contemporary English* Longman.
- Ross, G' R. (1968) *Constraints on Variables in Syntax*.  
 ————— (1970) 'On declarative sentence' in *Readings in English Transformational Grammar* by Jacor & Posenbanm. Ginn and Company.
- Terasawa, Y. 'The Cognate Object in the English Bible'『中島文雄教授還歴記念論文集』。
- Zandvoort, R. W. (1960) *A Handbook of English Grammar*. Maruzen